日本橋に青空を　日本橋川に光を

東京都・中央区日本橋本町『ホテルかずさや』
【記事投稿者：代表取締役社長　工藤　哲夫】

江戸とは、「江＝海水が陸地に入り込んだところ」の「戸＝入口」という意味で、隅田川が海に流れ込むあたりの名称でありました。その西側には広大な武蔵野台地が広がり、現在の日本橋・京橋のあたりは江戸前島と呼ばれる半島状の中洲で、さらに西側（東京駅から日比谷辺り）には日比谷入江と呼ばれた遠浅の海が広がっていました。この地域を始めに治めた江戸重長は、源頼朝が鎌倉幕府を開いた頃の人物で、その後、太田道灌、徳川家康に引き継がれました。家康は慶長 8 年（1603）年、征夷大将軍になると本格的な街づくりを開始します。まず、神田山などを掘り崩した土で日比谷入江を埋め立て、浜町付近から新橋に至る土地が整備され、日本橋、京橋などの商人地が出来上がりました。日本橋は、平川が東へ延ばされて日本橋川となったところに架けられた橋で、慶長 8 年頃に完成したとされます。翌年には一里塚が設置され、五街道の起点となりました。次に人々の食生活を支える市場が立ち始め、日本橋の魚市場や京橋の青物市場が相次いで開かれ、商店街も本町、大伝馬町、横山町、馬喰町から南の日本橋、京橋、銀座、新橋へと広がり、関西出身の商人たちが次々に店を開きました。その頃、日本橋界隈にも多くの宿が出来たそうで、その理由の一つは、馬喰町に関東郡代がおかれ、関東・東海の幕府直轄領の民事訴訟を扱っていたので、訴訟の為に上京する人が多かったからです。その様な宿は「公事宿」とも呼ばれ、通旅篭町という町名にもなった程でした。

首都高速に覆われた現在の日本橋

忠臣蔵の大石蔵之助一行が江戸での潜伏場所としていた旅宿の「小山屋」を始め、遠く長崎からオランダ商館長一行が江戸参府の折に定宿とした「長崎屋」等、歴史に残る人物が逗留した旅宿が多く集まっていました。「ホテルかずさや」は、初代工藤由郎が明治 24 年（1891 年）に長野より上京し、当時既にあった上総屋旅館を買取り、引き続き営業を始めました。旅館は、それ以前からありましたが、詳しいことは分かっておりません。現在はホテルとして営業しております。当ホテルが面している通りは、江戸時代に「鐘つき新道」（現在は時の鐘通り）と呼ばれ、古地図にも載っています。その謂れは、江戸最初の時を知らせる「時の鐘」が設置されたことによります。その鐘は「石町の時の鐘」（本石町を約して石町と呼んだ）と呼ばれ江戸庶民にも親しまれたそうです。また、時の鐘の傍で、俳人・与謝蕪村が夜半亭巴人の内弟子として俳句の修行をしておりました。先の長崎屋や小山屋もこの通りに面してありましたので、小さな通りではありますが、歴史の舞台となったことを考えると感慨深いものがあります。また、現在日本橋と称する地名が残っているのは（例、日本橋本町、日本橋室町等）、旧日本橋区（戦後、京橋区と一緒になり中央区となった）の名残で、住民の強い要望で町名廃止などの波にのまれること無く現在に至っております。さらに地元では、東京オリンピックの時に日本橋の上に架けられた高速道路を撤去して、日本橋に青空を呼び戻し、川を生かした街づくりを進める運動を展開しております。

高速道路を取った日本橋の将来図　写真提供：「日本橋ルネッサンス計画 100 年計画委員会」

東京都　中央区日本橋本町

ホテルかずさや

〒103-0023

東京都中央区日本橋本町４－７－１５

TEL　　：03-3241-1045